

文化とは何か、 どこにあるのか

対立と共生をめぐる心理学



山本登志哉

Toshiya Yamamoto

文化の主体は個人か集団か？
精神的なものか物質的なものか？
文化が個人の外にあるのだとしたら、
なぜ文化は変化するのか？

ひとびとが対立し、助け合い、憎しみ合い、愛し合いながら共に生きる、「私の体験」から立ち上がる新しい文化の心理学の誕生。

文化とは何か、 どこにあるのか

対立と共生をめぐる心理学

山本登志哉

Toshiya Yamamoto

はじめに

この本はひととひとが対立し、助け合い、遠ざけ合い、求めあい、憎しみ合い、愛し合い、そうやって生きていく中に文化が生み出されていく姿を、心理学的に探る試みのひとつとして書かれました。生活の中で、世の中の動きを見て、得体のしれない他者とのかわりに戸惑い、あるいはどこか心ひかれ、実践的なことから理論的な問題まで、文化について関心を抱いている様々な方に読んでいただくことができると願っています。

文化が発生するのは個人の中にはありません。自分と他者のかかわりの中に生成します。でも二者の間にはありません。二者の関係を見つめる第三の視点を組み込んで生み出されるもの、それが文化だ、というのが本書の基本的な視点です。

私とあなたと第三者の眼差しを含みこんだ世界の現れ方、そしてそのように世界を立ち上げながら生きる人の生き方、それは本書では「拡張された媒介構造（EMS）」という概念で表され、文化の現れを語る道具となりました。人はひとりでは生きて行けず、つねに対立を抱えながらも共生していかざるを得ない。「共に生きる形」としての文化のそんな姿に、少しでも近づいていければと願っています。

本書での著述は、できるだけ私や読者のみなさんが個人的に体験できること、あるいは「私の見えの世界」を手掛かりとして用い、そこからあまり離れることなく少しずつ問題を深めて考えられるように工夫をしました。そしてできる限り読者と共に問題を考える対話的過程が生み出されるように心がけました。世界について共に考えるその過程自体がひとつの文化的実践であり、この本はそのためのツールの一つであると考えています。

もしこの本を読んで、文化に対する見方が少しでもふくらみと柔らかさを増すことがあれば、それが私には最高の喜びです。

寡筆な私の最初の単著となる本書を、私のかけがえのない家族に捧げます。

2015年7月14日

山本登志哉

目次

はじめに i

序章 文化とは何か

0-1 文化——対立と共生を生むもの

0-2 心——普遍から具体へ

0-3 文化って何？

0-4 つながり方としての文化——生活者の「見え」から考える

1

第I部 文化の立ち現われ方

15
〜
98

第1章 文化はどう現われる？

1-1 文化の主観性

1-2 文化の客観性

1-3 まとめ——主観的客観の世界

17

17

22

26

第2章 文化が現われる文脈

2-1 意図と文化

2-2 文化一歩前

2-3 表現と規範

2-4 文化と集団

【エピソード1】 気をもろう

2-5 まとめ——共同性の差という文脈に現れる文化

27

第3章 文化集団の虚構性

3-1 文化の担い手——個人か集団か

3-2 文化はどこに?——空間的外延について

【エピソード2】 値引き

3-3 いつからある?——時間的外延について

3-4 メンバーは誰?——成員的外延について

3-5 文化を分ける特徴は?——内包について

3-6 まとめ——ばやける文化集団の境界線

45

45

第4章 文化集団の実体性

4-1 カルチャーショック

59

59

第6章 拡張された媒介構造ⅡEMS

101

第Ⅱ部 文化の語り方

99
180

【エピソード3】奪い取られる

【コラム1】謝罪の文化論

4-2 線が壁になるとき

4-3 お金という虚構の力

4-4 社会的実践と機能的実体化

4-5 まとめ——規範的要素の機能的実体化

59
64
69
72
75
77

第5章 文化集団の立ち現われ

79

5-1 逸脱が文化差となる時

【エピソード4】性格か文化か

5-2 差の認識から生み出される文化集団

【コラム2】文化の実体化が多文化教育に持つ実践的な意味

5-3 原因帰属と関係調整法

5-4 まとめ——文化集団の認識と関係調整

【コラム3】星座の実体性

79
79
83
86
89
93
95

6-1	対象を介した相互作用の構図	101
6-2	人間の社会的行動の一般構造	105
6-3	揺れ動くEMS	110
6-4	まとめ——人間社会を成り立たせるEMS	112

第7章 EMSと集団の実体化

7-1	「合意」として成り立つEMS	115
	【エピソード5】おもちゃの奪い合い	118
	【コラム4】「見る⇄見られる」関係と集団の実体化	122
7-2	異質な規範的媒介項の抑圧的調整	125
7-3	主体の二重化と主体間の平等性	126
	【エピソード6】主体の二重化	128
7-4	規範的媒介項の「主体」としての集団	131
7-5	まとめ——EMSを安定化させる集団の実体化	132

第8章 文化集団の実体化とEMS

8-1	集団間関係という人間的問題	133
8-2	EMSと水平的・垂直的組織	135
8-3	主体の二重化と階層的入れ子的集団構造	139

第9章 文化意識の実践性と文化研究

- 8-1 比較文化研究が立ち上がる
【エピソード8】手のつなぎ方の文化性 153
- 8-2 眼差しの差としての文化差 157
- 【エピソード9】どうしておこらないの 159
- 8-3 文化が発生する次元としての規範性・共同性 62
- 8-4 主観的現象の客観的研究とは 165
- 8-5 文化の対話的客観化 168
- 8-6 対話実践としての文化研究と具体的一般化 172
- 8-7 本書のまとめ——文化とは何か 173
- 【コラム5】 儒教的社会理論とEMS 140
- 8-4 規範的媒介項のズレと集団の実体化 144
- 【エピソード7】 私の物とは？ 145
- 8-5 まとめ——文化実践としての文化認識 149
- 【コラム6】 文化が個人に先立つものとして現われる理由 177

153

注 おわりに
190 181

索引 文献

(1) (5)

カバー・本文中手描きイラスト 山本つむぎ

序章 文化とは何か

0・1 文化——対立と共生を生むもの

文化という言葉がいろんなところで大事なキーワードになっているように思えます。

世界を見れば、東西冷戦といったイデオロギーの対立の時代が終わったと言われ、その後には民族や宗教といった文化的なものを単位にした対立の時代がやってきました。それは私たちの住む東アジア地域では、民族意識を強化しながら進行する国家間の対立という形で進んでいます。また世界規模では9・11に象徴されるように、国境を超えたネットワーク的軍事力が生み出す対立という形で進行していて、その対立を生み出す核として宗教意識が使われています。

他方で文化は、人々の間につながりを生み出す「ツール」としても働いています。民族意識も宗教意識も、「同じ民族」「同じ宗教」に生きる人たちをつなぐ働きを持っているわけです。さらにはそういう部分的なつながりではない、「人類」を単位にしたつながりの模索も繰り返されています。たと

えば世界遺産というものがしばしば話題に上がるようになりましたが、これは国境を超えて価値のあるものを世界で共有しようとする、新しい共通文化創造の試みとも考えられます。民主主義や人権といった政治文化的な意識の拡がりも同様です。エコロジーの思想をそこに加えることもできるでしょう。文化的な要素を取り込みながら、共生の關係がここでは模索されていきます。

ネット社会の出現は、そのような現代的な対立と共生の世界を急速に推し進めたように見えます。それは国や国のブロックを単位にした、旧来の人のまとまりを急速に崩し始め、その枠に収まらない要素が世界を動かしてきています。ビットコインの急速な発達に象徴されるように経済活動の領域でも、いわゆるテロの問題に象徴されるように軍事面でも、また地球温暖化に象徴されるような環境問題の面でも、国境が最初からスルーされてしまうようなつながりや対立が、どんどん私たちの暮らしを根底から変えていっています。

そのような新しい事態の出現に、改めて国やその連合というまとまりを強化し直すことで対処しようとする動きと、国境線と無関係につながりを生み出そうとする動きと、その両方の模索が同時に続いています。そこでは対立關係の深化と新たなつながりの模索という二つの要素が常に絡まりあつて事態が展開しています。つながりは国境線のような境界線が明確な集団という形で模索される場合も、それが全く不明確なネットワークとして模索される場合もあります。対立も、明確な境界を持つ集団を単位に作られる場合も、個人を単位に作られる境目の不明確なネットワークが生み出す場合もあります。

社会主義的計画経済システムと、資本主義的市場経済システムの闘いが後者の勝利に終わり、世界

の大部分が資本主義的市場経済システムを共通の基盤としつつありますが、ただそれに対する公的な権力の関わり方に個性が目立つ時代になりました。その結果、対立と共生をめぐる世界規模の争いは、政治経済システムというハードの面の争いの性格が相対的に弱まり、今度はハードの面を共有した者同士の「文化」というソフト面の争いが前面に出てきたように思うのです。軍事対立やテロリズムの問題などがその背景に経済的な矛盾、利害対立を抱えていることは明らかですが、そこに至るプロセスの中で、「文化」についての意識が非常に重要な意味を持っています。経済的対立が文化的な対立の様相を伴うことで軍事対立につながる。そういう展開が改めて明確になりつつあるのではないのでしょうか。

逆に言えば、そのような経済的対立を軍事対立につなげず、異質な者同士の相互依存と共生につなげるような「文化的な工夫」もまた、その重要性を増しているという見方もできそうに思います。

0・2 心——普遍から具体へ

話を心理学のほうに移します。

ヨーロッパで生まれた現代の心理学は、物理学を中心とする自然科学の成功を模倣する形で近代になって哲学から別れました。

その時代的な背景であった近代は、人類すべてを包括できるものと想定された共通の基準を設定する「普遍主義」の流れを作ってきたように見えます。思想の面では個々人の差異を超えてすべての人

に認められる人権概念、政治の面ではすべての人が権力の源泉として平等な地位を与えられる主権者概念、法の面ではすべての人を同等な権利主体と見なす人格概念、経済の面では文化を超えて同一視される経済人概念などに、それがよく現われているように思います。

実際新たに誕生した心理学もまた、普遍的な知のシステムとして作られてきた自然科学に範をとり、人類すべてに通用する「普遍的な人間像」を人々に提供する試みとなりました。その普遍性は、人と動物に留まりません。動物の進化という、さらに大きな普遍性に人間の心を位置づけて理解する枠組みも常識化して現在に至ります。

もちろん普遍だけで人を理解し語ることは不可能です。私たちはそれぞれに個性を持って生きていますし、それは他の誰でもない、他者とは取り換えのきかないこの私が私として生きることでもあります。心理学でも個性の問題は取り上げられてきました。さまざま心理学的テストが生み出され、それぞれの人が持っている心理的な特徴（個性）を測る道具になっています。文化は生物種としてのヒトの普遍性と、個人としての人の個別性の間にある現象ですが、文化差の問題も集団的に共有された個性の問題となります。

心理学は普遍的な人間像を求めて個性を否定したわけではありません。ただし個性を普遍的な人間像をもとに、その二次的なヴァリエーションとして説明しようとしてきました。かつては基礎心理学と応用心理学という区分けがよくなされましたが、普遍的で標準的な人間像を明らかにする基礎心理学こそが心理学の王道であり、個性の差や年齢の差、あるいは「老い」や「病理」や「障がい」、「犯罪」といった問題を追究することは、そこからの「外れ方」やその原因を明らかにするための「応用

問題」といった位置づけでした。普遍が主で、個別具体は従だったのです。

文化差もそのひとつになります。普遍的で一般的な心理システムを共有した人間が、文化という環境的な要因を与えられることで「文化化」され、多様なヴァリエーションを育てていくという発想がそこにあります。比較文化心理学的な研究はそのような発想の中で、文化の違いやその違いを生む要因を明らかにしていくというスタンスをとることになります。一世を風靡し、今も強い影響力を持つ集団主義と個人主義の議論なども、「集団 vs 個人」という一元的な物差しを作って世界中の文化差を測定し、説明しようとする、普遍主義的な心理学的文化研究の典型です。この場合はその物差しが普遍的ツールと見なされ、文化はその物差し上のヴァリエーションになるのです。

そのような「生物学的普遍主義」とでも言えるような発想に原理的なところで批判を加えたのは、旧ソ連の心理学者ヴィゴツキーでした。この流れは興味深いことに、旧ソ連が敗北していく過程でアメリカに移入され、ソ連解体後にかえって大きな展開をして、それまでの比較文化心理学に対する「文化心理学」とか「社会文化心理学」あるいは「文化・歴史的活動理論」といった新しい心理学の流れを作っていきます。

旧来の心理学とこの心理学の大きな違いは、何を心の普遍性と考えるかです。前者は文化にかかわらず共通する普遍を問題にし、上記のように「生物学的な普遍性を持った個人の内的な心が、外的な要因によって文化化される」という発想で文化をとらえます。これに対して後者では、「個人の心というものはその自体が個別的で具体的な文化としてしか成立し得ない」と考えます。この議論では心が文化である、ということが、人間の精神の「普遍的な性格」とされます。その意味で、個別具体的で

あることが主になるのです。

この流れが今や比較文化心理学にも大きな影響を及ぼすようになり、たとえば集団主義と個人主義の議論の最新版という趣を持つ、文化的自己観の概念でアメリカの比較文化心理学をリードする研究者の一人である北山忍さんたちも、ヴィゴツキーの流れを取り込んだ彼らの「文化心理学」を展開しようとしています（北山 1997）。

文化の領域に限らず、心というものを、個人の内側の独立したシステムのように考えない発想も、心理学では次々に展開をしました。私も関わっている供述分析の領域で言えば、記憶という現象もそのような発想でとらえるべきもののひとつです。記憶は外界の情報をコード変換して脳内にストックし、必要に応じて取り出すといった、個人内部で基本的に説明可能な単純なシステムではないことは明らかなのです。

記憶は「語り」を通して人と共有されるに至り、「記憶」として認められます。ところがこの記憶に関する語り、想起は他者との語りの場の性格によって方向づけられ、その場で「生み出される」ものなのです。場の性格が変われば、そこで生み出される記憶の内容も時に劇的と言えるほど大きく変わってしまいます。「告白」や「目撃証言」によって生み出される冤罪も、そのような「生み出された物語」（山本 2003）としての記憶の産物です。

想起だけではありません。そもそも情報を記憶として取り込む段階でも、またそれを理解して保持しておく段階でも、私たちは私たちにわかりやすい形に情報を処理して扱います。特に人が絡む出来事では、その出来事を一種の物語のように理解できることでわかりやすさが増します。わかりやすい

からその物語が事実をうまく反映しているとは限りません。実際はむしろ逆で、私たちの研究からもういくらでもその例を挙げられますが、わかりやすさを生み出すために、いろいろな事実が無視されたり否定されたり、あるいはなかった事実が付け加わることは頻繁に、ごく普通に生じる出来事です。

出来事の記憶がそのような物語的な構造化の影響を受けないことは困難です。そしてそのような個々人の生み出す物語は、外的な人間関係の構造と無関係には成立しません。ということは、ヴィゴツキーなら「ドラマ」という表現を用いるかもしれませんが（ヴィゴツキー 2008：田島印刷中）、バルレットの記憶研究でも取り上げられますが（Bartlett, F.C. 1932/1983）、その人間関係の構造、あるいはそれをガイドする物語それ自体が文化的なものであるとすれば、現実に存在する具体的な記憶現象は、単なる生物学的・生理学的な普遍性によつては理解できず、その文化性を考慮しなければ扱いきれないものになるわけです。

状況的認知という考え方もそうですが、個人内部の自立的な現象と思われていたことが、外部との関係の中でしか理解できないことが明らかになりました。それと同質の問題が、心理学のいろいろな領域で起こってきています。人の心は環境との関係で成立し、そしてその環境として人間関係はきわめて大きな意味を持つのであって、心の具体的なあり方は、そのような具体的な人間関係から離れた抽象的な普遍的システムとは見なしがたいことになります。

文化という現象は、単に応用心理学の一領域に関わるローカルな問題ではなく、「心の普遍主義」を相対化する大事な論点として、近代の心理学の原理を揺るがす問題となつて、今立ち現われてきていますと私は思えます。

0-3 文化って何？

さて本書の役割です。

ここまで少し考えてみたように、文化という問題が、現在いろいろな面でも大きな意味を持つ巨大なテーマであることはたぶん間違いないと思うのですが、もちろん本書でそういう大きな問題全体を直接に扱おうというわけではありませんし、そんな力が私個人にあるわけありません。

私がここで扱いたい問題は、もっと素朴なこと、つまり「文化って何？」という問題です。

修士論文の研究以来、私は人間の所有という現象について、発達心理学的な視点から研究してきました。そして1歳から3歳にかけて、その後の人間的所有を基礎づけるような大きな転換が起こることを見出してきました。それは日本の、京都という一地方の、小さな保育施設で見出されたことでした。

でも人間の所有というのは、時代によって、社会によって、ほんとうにさまざまな形で現われます。文化ということ抜きに、「人にとって普遍的な所有の発達」ということを考えることはできません。ある時期の京都で見出されたことが、他で見出されるとは限らないのです。

ところが、いざ文化という問題を取り込んで研究をしようとしても、いったいそれが何なのか、ちつともわかりません。子どもの行動のどこに「文化」というものがあるのか、大人の関わりのどこに「文化」というものがあるのか、目を凝らして子どもを見つめても全然見えません。文化を何か外的な環

境要因として取り出そうとしても、皆目見当がつかないので。

心理学的な文化比較の研究や、人類学の議論などを見てみると、文化についてのさまざまな議論があります。文化によって人がいかに異なった生き方をしているかが見えてきます。「人は文化に影響されて生きている」ということは否定できないように見えます。

にもかかわらず、ではその「人に影響する」文化っていったい何なんだろう、と考えると、とたんに訳がわからなくなるわけです。文化が人に影響するとすれば、それは人の外側にあるのでしょうか。それはどこにあつて、どのようなメカニズムで人に影響するのでしょうか。文化の主体は個人でしょうか、集団でしょうか。それは精神的なものでしょうか、物質的なものでしょうか。主観的なものでしょうか、客観的なものでしょうか。実体でしょうか、虚構でしょうか。文化が個人の外にあるのだとして、それによって人が作られるのだとすれば、ではなぜ文化は変化するのでしょうか。

いろいろな疑問が思い浮かびます。文化についていろいろある見方の中で、自分はこの立場で、という表明に基づく研究はもちろんあるのですが、その他の立場とのつながりがなかなか見えません。文化としての心と言う文化心理学は、旧来の実験心理学的な心の概念の枠組みを出ない比較文化心理学に異を唱え、それはそれとして正当な議論と思えるのですが、しかし、では比較文化心理学が追究する「集団間の差」の問題に迫れる理論的しかけがあるかという点、これもなかなか見えてきにくいのです。^[1]そういう心理学的文化研究の壁を、「そもそも文化とは何か」という問いが十分深められていない現状が象徴しているように私には思えるのです。

それはそうだよ、文化はもともと「物」ではなくて、あるシステムなんだから、直接目に見えるよ